

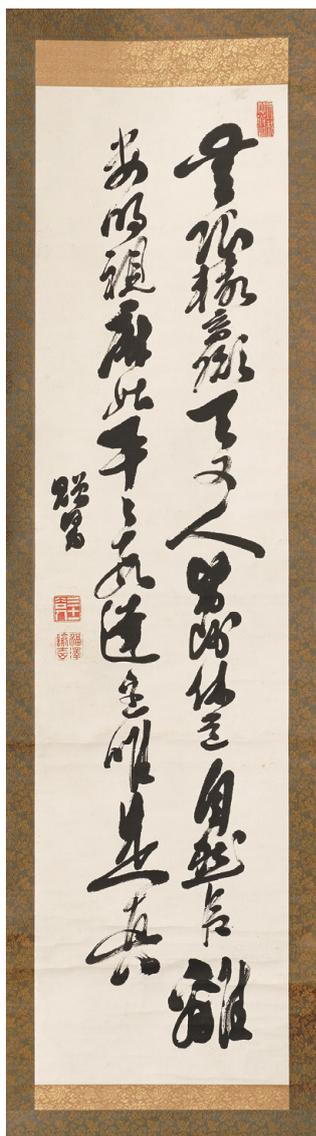
# 福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第22号 2015年3月31日 発行

目次

* 福沢諭吉漢詩遺墨……………	1	* 守屋謙二先生の書と画……………	6・7
* 講演会「漢詩から見た福沢諭吉の人生観」 ～2014年11月15日開催～ ……	2	* 新収資料紹介……………	8
* 戦争プロジェクト活動報告……………	3・4	* 韓国における資料調査と研究発表／主な動き…	9・10
* 奥山春枝特別展……………	5	* センター諸記録（2014年10月～2015年3月） ……	11
		* スタッフ一覧……………	12



無限輪贏天又人 醫師休道自然臣 離  
 妻明視麻姑手 々 段達辺唯是真  
 贈医 三十一谷人 福沢諭吉

福沢諭吉漢詩

【奥山篤信氏寄託】

医師に贈る 医学は自然のはたらきと人間の知恵との限りない勝ち負けの争いである。医師は、自分は自然の臣下にすぎないなどと言ってはいけない。離妻のように病巣を見ぬく鋭い眼力と、麻姑の手がかゆいところに届くような懇切な手当で、ありとあらゆる手だてを尽して病と闘うところに医術の真骨頂があるのだ。（金文京『福沢諭吉事典』706頁）

門下生であった奥山春枝に贈られたもの。奥山は山形県上山出身で、明治26年に慶應義塾を卒業し、のちビル・ブローカーとなった。坂井達朗『評伝 奥山春枝』慶應義塾大学出版会、2010年（本紙5頁参照）





## 福沢先生の揮毫と書画会

京都大学人文科学研究所教授 金 文 京

昨年の十一月十五日、三田の演説館で「漢詩から見た福沢論吉の人生観」という題の講演をさせていただいた。たいそうな題であるが、ありていに言うと私が数年来、『福沢手帳』に連載中の福沢先生の漢詩の訳注、評論を適当にまとめたもので、福沢漢詩のキーワードは「自らを笑う」と「戯れ」で、そこに著作からはうかがえない先生の人生観が垣間見えるという内容であった。それをここでまた要約してもあまり新味がない。そこで以下、講演の最後に簡単にふれた先生の書画会への出品について紹介することにしたい。これは従来、知られていなかった事実である。

先生は人から揮毫を頼まれるのが嫌いであった。漢詩「揮毫戯作」では、人から催促されて、「今宵泣々秃筆を執るも、紙に向かいて奈ともする無し尚面堂」と言っているし、「老生への書の所望は福島正則へ茶の湯を命ずるに異ならず、流儀違ひ」(明治二十九年、柳田藤吉宛書簡)のように、手紙にも揮毫を断った例がある。揮毫が苦手だった理由は、自分の書があまりうまくないことを知っていたからであろう。『福翁自傳』では、「私は幼少の時から教育の世話をしてくれる者がいないので、ロクに手習をせずに成長したから、今でも書が出来ない」(「不風流の由来」)と正直に告白している。

そういう先生が書の稽古をはじめたのは、明治十一年、四十五歳の時で、これは甥の中上川彦次郎の勧めによるものであった。まさに五十に手のとどく手習いで、漢詩「書を学ぶ」では、「五十にして自ら啜う字を学ぶことの遅きを」と自嘲ぎみに述べる。しかしその後は精進の甲斐あって、書風一変、肉太でのびのびした、「天真爛漫なる一種達筆の書風」となった(石河幹明『福沢論吉傳』第四十七編第五「手跡と揮毫」)。今日われわれが目にする先生の書風はまさにこれである。

とは言っても、あくまで「一種達筆」で、本当にうまい字でないことは、本人も十分自覚していたであろう。今日残された先生の書は、塾生やごく親しい者にあたえた物ばかりだし、自慢も、漢詩「甲午年(明治二十七年)元旦試毫」に、「子女今朝毫を試す処、乃翁も亦墨痕の鮮やかなるを誇る」と、内輪での自慢話にすぎない。

ところがここにやや意外な資料がある。明治の前半は江戸の遺風を受け、東京は両国の料理屋などで書画会が

しばしば開催され、専門の書家はむろん、腕に覚えのある名士が自らの書を出品、時に即売も行われた。図版はそのような書画会の案内状で、「書畫(画)會(会)九月十日於東兩國中村樓開筵致候間、海内之諸賢不諱晴雨御光臨是祈(東兩國中村樓に於いて開筵致し候間、海内の諸賢晴雨を諱せず御光臨是れ祈る)」、「高名大家諸先生揮筆」とあり、上三段には、大沼枕山、小野湖山、勝海舟、中村敬宇、成島柳北、日下部鳴鶴、山岡鉄舟、高橋泥舟など錚々たる顔ぶれが並ぶが、第四段に、福沢論吉、小幡篤次郎、中上川彦次郎など慶應関係者が名を連ねている。

案内状には九月十日とのみあるが、これが明治十四年であったことは、この年の九月九日に当時有名な料亭であった両國中村樓が再建され、三日間開業式が行われたこと(『明治世相編年辞典』)、また「東京日日新聞」九月十二日の記事に、この開業式について「巖谷、長、伊東、高林、安田の諸名家をはじめ紳士数十名を招待」とあり、当時著名な書家であった巖谷一六、長梅外、伊東(伊藤桂洲?)、高林二峰、安田老山の名が案内状に見えることから間違いはない。このころ中村樓では交詢社の集まりなども開かれており、おそらくその縁で先生も出品したものであろう。年譜によれば、先生はこの日、三田で演説会を開いており、参席はしなかったかもしれない。また「福沢論吉」の前に○があるところからすると、その前とは何らかの区別があったと思える。それにしても「高名大家」に伍して自分の書を出品しているということは、「今でも書が出来ない」という言葉とは裏腹に、存外自信があったのかも知れない。何を出品したのか、気になるところである。



## 「残す」という営為の想起

### ——「慶應義塾と戦争Ⅱ 残されたモノ、ことば、人々」展示報告——

福沢研究センター准教授 都 倉 武 之

2013年8月に始動した当センターの「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトの2回目の展示会を「残されたモノ、ことば、人々」展と題して、2014年10月7日～10月31日の会期で開催した。前回の「慶應義塾の昭和十八年」展(本通信19号参照)は「学徒出陣」に至る戦時下の塾史を時系列でたどることとしたが、今回は、その後塾生・塾員が直面した、多様な戦争体験を主題とした。

従来慶應義塾関係者の戦争体験として手に取りやすい記録は非常に限られた人数のものであり、それらは概して特殊な体験が多かった。例えば特攻や脱走、あるいは戦後大学教員となった者の回想がその例である。身近に戦争体験者が多数いた時代が終わり、体験者が稀となりつつある今となっては、むしろかつて記録されなかった、ありきたりで、語るほどでもないと思われてきた体験をも含めて多様な記録を残しておくべき段階にあると考えられる。そしてそれらが、それぞれ個別の体験として存在したのではなく、有機的に絡みあった「日常」の中にあつたことを想起させることが、戦争の時代を現代の学生に引き寄せる糸口になるのではないか。

このような意図から企画した今回の展示では、例えば単に戦死者の遺書を紹介するのではなく、彼らにも、現在と同じキャンパスに通う同年代の塾生としての生活があつたことを想起させる工夫を配した。第1会場(図書館展示室)では、主として著名な慶應出身戦没者を取り上げ、朝寝の小泉信吉が妹に起こしてくれるよう頼んだメモ、宅嶋徳光の学生時代の旅行写真、上原良司の学生証や塾歌・若き血などを書き込んだアルバムなどを、遺書などの「残されたことば」とあわせて展示した。

第2会場(アート・スペース)では、あるクラス(昭和14年入学法学部予科F組)、ある部活(水泳部競泳部門)、ある特別攻撃隊(筑波隊)などにクローズアップし、それぞれが辿った運命とそれにまつわる資料を展示する形を取った。あるクラス全員を描いた当時のイラスト、

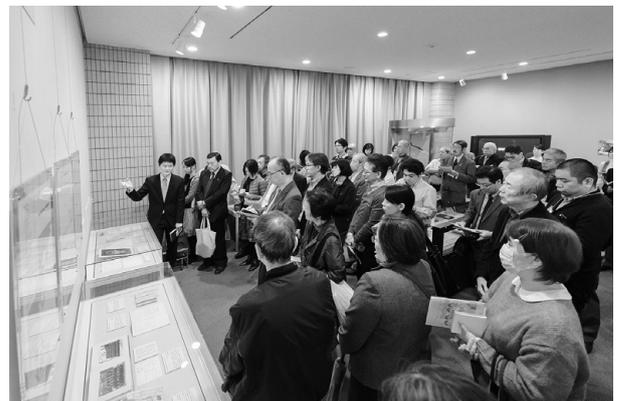
筑波隊全員の出身校などを網羅した一覧表(当プロジェクトの員、政治学科2年田口雄飛君の苦心の作)などは、見る者に強い印象を残したようである。

本展ではさらに、この展示を構成する展示物や記録を「残す」という営為があつたことへの想起を意図し、無事復員した者、あるいは戦死者の家族や戦友など、「残された人々」の存在と、「残されたモノ」が伝えうる歴史の可能性について、意識の喚起を促そうと意図した。誰がこの「モノ」を残し、寄贈したか、といった事実を出来るだけ書いたのもそのためである。また本分野に慶應で先鞭をつけられた白井厚名誉教授よりご寄贈いただいた、塾員への一斉アンケートの原紙(約1700枚)もその象徴的存在となった。

会期中に第1会場4500名、第2会場1200名の来場があり、一定の評価を得られたと感じている。しかし、必ずしも資料の幅広い収集と結びついていないのが現状である。引き続き粘り強い広報と丹念な調査に取り組み、この時代の基礎資料の蓄積に貢献したいと考えている。

本展開催に当たり、ご協力賜った関係各位に改めて御礼申し上げます。

なお2015年度の展示「慶應義塾の昭和二十年」(仮)は、6月1日～8月6日(図書館展示室)、7月1日～31日(アート・スペース)を予定している。



ギャラリートークの様子(10月23日)

## 上原家資料から見る戦時下の「日常」

福沢研究センター調査員 横山 寛

今回の「残されたモノ、ことば、人々」展では、「ある一家の場合」と題して1コーナーを設け、男兄弟全員が慶應義塾で学んだ一家を紹介した。これは戦時下の慶應義塾の学生生活を知ると同時に、息子全員を就学のため東京に送り出すことができた塾生の家庭がどのような生活をしていたのか、その一端をうかがう試みでもある。対象とした上原家には、長野県有明村（現安曇野市）で開業医を営む上原寅太郎と妻よ志江のもとに5人の子供がおり、長男良春・次男龍男は医学部を卒業して軍医となり、三男良司は経済学部在学中に学徒出陣した。そして3人とも戦没した。

展示した資料は大きく分けると兄弟たちの愛用した品々と、手紙など書き残したものの2種類である。

主に良春が使い、登山風景、医学部の授業、家族など実に様々なものを写したカメラ、氷の張った諏訪湖で滑ったスケート靴、実家の庭にあったテニスコートで使用したラケットなどは彼らが様々な娯楽を楽しんだことを伝えている。



良春使用のスケート靴

一方で家族間の手紙は当時の慶應義塾をめぐる状況へ示唆を与えてくれる。例えば受験を控えた良司へ助言を与える手紙のなかで良春は、文系の学校として「松高〔旧制松本高等学校のこと——筆者〕の文科」と「慶應の経済」を薦め、「やはり有利なのは帝大、殊に東大、私立では慶應の経済」としている。そして松高と慶應の試験が重なった場合には「慶應を捨てて松高を受けるが宜しからう」と記している。

また昭和11年、日吉移転一年目の医学部予科に入學した龍男が母親へ宛てた手紙には「日吉の予科校舎は非常に立派であり松本中学校もちょっと顔負けする位」とあり、新校舎への好印象がみとれる。同じ手紙では桜や桃畑の花が咲く東横線沿線の通学風景を絵の様に美しく表現している。さらに龍男が予科時代に几帳面につけていた金銭出納帳は下宿学生の懐具合を如実に物語

る。その費目にはキャラメル・チョコレート・しるこ・ケーキなどが並び、甘いものが大好きな一学生の姿が浮かび上がってくる。

0.10	22日	演習費	3.00	習志野	cake	0.16
0.10		しるこ	0.05	演習		0.27
		キャラメル	0.05	習志野	30日 lunch	0.15
0.15	23日	キャラメル	0.10	習志野	高二吉	0.20
0.15	24日	梨	0.05	習志野	Album	0.50
0.10		切手	0.03	習志野	菊の花	0.05
0.15		チョコレート	0.10	習志野	31日 ナシ	
1.00	25日	cake	0.30	習志野	11月1日	
0.12		同棲	0.20	習志野	代々木→信濃町	0.15
0.15		銭湯	0.05	習志野	信濃町→四谷	0.05
0.28	26日	貯金		習志野	銀座→新宿(バス)	0.10
0.30		散髪	0.40	習志野	cake	0.20
0.15		高二吉	0.20	習志野	2日 インキ	0.25
0.01		cake	0.45	習志野	色鉛筆	0.20
0.15	27日	祭へ	15.20	習志野	corner	0.16
0.24		自治会費	0.10	習志野	ハナ歌	0.10
0.15		民間の水の金	0.22	習志野	cake	0.36
0.15	28日	lunch	0.15	習志野	3日 風呂	0.05
1.80		早慶戦切符	0.10	習志野	4日 高二吉	0.20

龍男の金銭出納帳(大学予科時代)

このように今回展示した上原家の資料はきわめて個人的なもので、断片的なものにすぎない。しかしそれでも当時の学生像や抱かれていた慶應義塾のイメージなどを知るうえで貴重な手がかりを与えてくれるものであろう。戦争と向き合った時代に学生や大学にどのような「日常」があったか。そうした事実を丁寧に記録することが求められており、こうして「残されたもの」一つひとつが戦争の時代を考えるうえで有益な材料になるのではないだろうか。



上原家のテニスコートで遊ぶ良司  
(後列右から2人目)と妹や近所の子供

## 秋の特別展「上山ゆかりの起業家奥山春枝の生涯」を終えて

〈公財〉上山城郷土資料館学芸員 長 南 伸 治

上山城郷土資料館では、2014（平成26）年10月11日から11月24日までの計45日間、慶應義塾福沢研究センターと共催で、明治中期に慶應義塾に学び、その後“ビル・ブローカー（銀行の資産運用業）”として近代日本の経済界で活躍した、山形県上山出身の起業家奥山春枝の生涯を辿る特別展「上山ゆかりの起業家 奥山春枝の生涯」を開催しました。

会期中は、福沢研究センターをはじめとする多くの方々から広報に御協力いただいたこと、さらに、ちょうど上市市内の紅葉シーズン、かつ、好天に恵まれる日が多かったこともあり、最終的には8254名もの方にご来館いただき、特別展をご覧になっていただくことができました。また、会期中の10月26日（日）には、『評伝

奥山春枝』（慶應義塾大学出版会、2010年）の著者である坂井達朗先生（慶應義塾大学名誉教授・福沢研究センター顧問）を講師に迎え、「草創期のあるビル・ブローカーを支えた思想と人脈―羽州上山出身の奥山春枝の場合―」と題して講演いただきました。講演会当日は、県内各所で様々なイベントが開催される「人集め」が難しい日に重なっていましたが、幸いにも計47名もの受講者にお集まりいただきました。受講者は主に上市市内と近隣市町村在住の方でありましたが、遠方から奥山春枝御遺族御一行と福沢研究センタースタッフの方にもお越しいただきました。受講者は一様に、2時間に及ぶ坂井先生の講演に熱心に聞き入っていました。講演終了後の質疑応答の時間には、受講者の一人から坂井先生も感心するほどの「鋭い」質問が寄せられるなど、盛況の裡に講演会は終了しました。

以上のように、特別展・講演会共々、無事に、かつ、盛会の裡に終わることができました。特別展開催にあたり貴重な史料をお貸しいただいた奥山春枝御遺族の皆様、そして、同じく史料をお貸しいただいたのみならず、展示・撤収作業、講演会への講師派遣など、多岐に渡ってご協力・ご支援いただきました福沢研究センターの皆様に対し、この場を借りて改めて篤く御礼申し上げます。

思い起こせば、福沢研究センターのお世話になりつつ、長きに渡って過ごしてきた東京を離れ上山に就職した2013（同25）年春、同センターの西沢直子先生から、「上山にこんな人がいたのをご存知ですか？」と、前出坂井先生の著書をお贈りいただいたことが、筆者にとって奥山春枝の存在を初めて知るきっかけとなりました。その当時、個人的な見解ではありますが、上市市内で奥山春枝の存在をご存知の方は、当地在住の奥山の親戚筋にあたる方を除いて、ほとんどいないという状況でした。そんな状況ではありましたが、坂井先生の著書を読み進めるうちに、奥山の存在を何とかして上市市民に紹介しなければとの思いは抑えきれないものとなり、最終的に「来年秋に奥山春枝の特別展を開催するぞ！」という勢い（または、根拠の無い自信）と共に準備に着手し、周囲の皆さまの助けのおかげで、何とか最後までやり遂げることができました。

最後に、今回の特別展は多くの方々から奥山春枝の存在を知ってもらった大きな「きっかけ」となりました。この「きっかけ」を無駄にすることなく、上山に奥山春枝の存在・業績が根付くよう仕向けていくことが、今後、上山城郷土資料館に課せられた使命だと感じています。この使命を達成できるよう日々の業務に精進していきますので、今後とも当館の活動に対し御支援・御鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



## 守屋謙二先生の書と画

### —リアリズムと白日夢

中部大学特任教授  
慶應義塾大学名誉教授 前田 富士男  
三田芸術学会会長

守屋謙二先生作の画「芭蕉と百合」は、画面の結構に秀でて観る者をひきつけてやまない。青芭蕉の葉鞘が没骨様に幾重にも墨の濃淡で描かれ、下方の黄赤色の野趣にとむ鬼百合の花と見事な対照をなしている。画賛の七言の詩は守屋先生自作で、いつもながらの行書の、紙に刻みこむような運筆は葉鞘の濃淡と百合の黄赤と相まって調和を生みだす。

閑庭一隅植芭蕉 雨後伸長幾重葉  
翩翩揺風白日夢 碧玉板上青蛙跳

先生は花卉に画賛を配した作品を多く残したが、庭の「一隅」とはいえ、空間のたたずまいを示唆する作品は少ない。1950年代後半の作であろう。青芭蕉といい鬼百合といい、初夏の季節感も初々しい。この作者はおおよそ好まない言葉だろうが、ぬきんでた秀作と評してよい。

守屋謙二先生は、1898(明治31)年に岐阜県大垣市の醤油醸造業を営む旧家に生まれ、優れた文化的な家庭環境のもとに育たれた。哲学や仏教学への関心から京都の大谷大学に入学されたが、すぐに1918(大正7)年慶應義塾大学文科に入学し、三田に出講していた安倍能成に哲学を、塾の沢木四方吉に西洋美術史学を学んだ。1925(大正14)年に予科の教員に就任、ドイツ語教育を担当し、沢木四方吉の逝去(1930年)後、1937年に文学部助教授に昇任し、現在の文学部美学美術史学専攻の基盤をつくられた。1936年にはハインリヒ・ヴェルフリンの様式論の名著『美術史の基礎概念』(1915年)の訳書を岩波書店から刊行した。

とくに注目すべきは、ドイツでの研究活動であろう。先生は1940年にミュンヘン大学に留学されてヴェルフリン門下の俊才ハンス・ヤンツェン教授のもとで研鑽を積み、1942年にはライプツィヒ大学日本研究所専任講師に任じられた。日本美術史の様式研究がドイツ国内で高く評価され、各地の講演に赴かれ、やがてブロックハウス書店から『日本の絵画』(1953年、独文)を出版する契機となる。ドイツ滞在中に守屋先生は田舎の民家や花卉を水墨にて描き、そこに七言絶句の賛を入れた作品を制作され、ライプツィヒのグラッシ民族学博物館での書画の個展は注目を集めた。1945年6月にシベリア経由

で敦賀港を経て大垣に帰られ、終戦後の10月から三田の教壇に戻られた。

守屋先生は中学時代から書家大野百錬の指導をうけ、終生一貫して書を大事にされた。七言絶句「閑庭一隅」には、別作に書幅があり、書に託す先生の息づかいを如実に感じさせる。文人という洒落な雰囲気など破壊してあきない右肩上がりの武骨な軋んだ筆致である。画「芭蕉と百合」では夏芭蕉の葉鞘にのるように画賛をいれたためか、同じ絶句ながら筆意は、おだやかだ。とはいえ、書画一致といった常套句など知らぬ気に、線描に重きをおく姿勢は何人も見誤るはずがない。ヴェルフリンが「線描」と「彩色」の両極を美術史の基礎概念として提示した名著の訳業は、書家守屋先生には、多くの刺戟にみちた仕事であったにちがいない。弟の守屋多々志氏は法隆寺金堂壁画再現模写で知られるように、院展を代表する歴史画の達人として著名で、兄弟なかよく絵画論も重ねたようだが、多々志氏の花弁の端正な輪郭線と謙二先生の花弁とは、およそ相容れない。

画「芭蕉と百合」は、洗竹居と号された日吉の先生のお宅での囑目の作であろう。この作品を贈られた小玉得太郎氏への書簡に、先生はこの画を「リアリズム」と述懐されている。画賛絶句の筆勢がおだやかなのも、それゆえだろう。私は、先生の日吉本町のお宅での大学院演習に連なった最後の博士課程院生である。1972年春の4月、前年からつづくヴェルフリン「基礎概念」を予習していたが、春子奥様から初回は休講とお電話をいただいた。まもなく22日、訃報に接した。演習の行われた応接間の窓からは、芭蕉が眺められた。

画「芭蕉と百合」にはしかし、大垣のご実家の幼い日々の記憶も重なってしよう。今も「カネマル守屋孫八本家」表札を掲げる旧宅の前、川向こうの指呼の間に、俳人谷木因の家があった。松尾芭蕉は「奥の細道」の長旅をまさにこの蕉門木因宅で結び、船問屋の名門谷家の手配で水門川から船旅で伊勢にむかった。水門川も「木因さん」も守屋先生のご実家のいわば庭つづきである。夏芭蕉をおく本作の画面には、リアリズムとはいえ、蕉庵をわたる白南風という「白日夢」も託されているにちがいない。



①



②

### 小玉得太郎氏寄贈資料

2014年8月、小玉得太郎氏より故守屋謙二名誉教授の作品5点の寄贈を受けた。寄贈に際しては秋田三田会島山茂氏、小玉武生氏に多大なご尽力をいただいた。

画	漢詩
① 1950年代後半 1,395 × 351mm 1幅	④ 「松風汎々夕陽沈…」 1,327 × 342mm 1幅
② 1,354 × 349mm 1幅	書
③ 337 × 348mm 1幅	⑤ 「快然自足」 1面

(1965年9月、「洗竹居小品——守屋謙二書画展」が東京の高島屋美術部画廊で開催された。同展カタログで①は「芭蕉と甘草」と記載されているが、カンゾウは葉形が異なる。ここでは葉形と色から鬼百合とみなし「芭蕉と百合」とした。なお同展には書画34点が出陳されたが、②③④⑤はカタログには収録されていない。)



③

### 小玉得太郎さんのご紹介

大正14年秋田県飯田川町に生まれる。旧制秋田中学を経て昭和21年慈恵医大予科卒、同25年慶應義塾大学文学部美学美術史専攻卒。守屋謙二教授の薫陶を受け、あわせて同郷の「沢木四方吉」にも深く傾倒。「近代芸術研究会」のゼミを開設。「三田芸術学会」の再興にも貢献した。義塾卒業後、沢村三木男のすすめで「文芸春秋」勤務の準備をしたが、病を得て、家業たる清酒太平山蔵元に帰る。昭和30年代には「酒は天下の太平山」のキャッチコピーを首都圏に轟かせる。その後老舗「本金」の再生を図り「本金西武」を創立するなど、長年にわたり地元経済界に貢献、「秋田市功労者」認証。秋田三田会の元会長にして現顧問。

在学中から辻井喬（堤清二）とも交遊を持ち財界同人誌「ほおづえ」会友として文筆をよくす。また後年、岡

本太郎を秋田の自邸に招き、沢木四方吉の故郷男鹿半島に伝わるプリミティブな「なまはげ」を紹介。感動した岡本が「これぞ縄文！」と叫び、名著「日本再発見・芸術風土記」を著す。仏文学者の佐藤朔元塾長とも親交を深め、肝胆相照らす仲となる。地元秋田での文化活動にも分厚い功績があり、ニューヨークで成功したユーゲニズムの画家岡田謙三の作品101点を秋田市千秋美術館に据えて「岡田謙三記念館」を併設するにあたり決定的な貢献を果たす。さらには故郷ゆかりの日本画家寺崎廣業、平福穂庵・百穂の里帰りに実績を残すなど「秋田市文化章」に浴す。経済と品性の両立をもって文化となす「福沢実学」(サイヤンス)を体現した先輩である。

文責：秋田三田会

## ❖ 新収資料紹介

平成26年9月から平成27年2月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。(物故者敬称略)

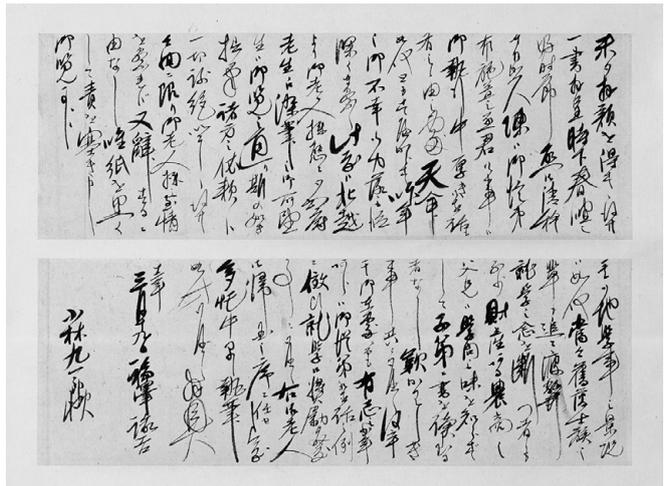
### 福沢諭吉関係資料

#### ■ 小林九一郎宛福沢諭吉書簡 明治12(1879)年3月19日 1幅

【購入】

小林九一郎は未詳。小林の従弟にあたる布施益之丞の死を悼み、「北越」より上京した「御老人様」(布施益之丞の父か)の求めに応じて揮毫したことを告げる。

布施は明治7年4月2日に慶應義塾医学所に入学しており、入学者名簿である『慶應義塾入社帳』(復刻版、慶應義塾、1986年)によれば新潟県の出身で、身分欄には「農」とあり、年齢は18歳、保証人は平松屋六三郎となっている。またこの手紙の中で福沢は、旧武士層が疲弊して「就学之念」を断つものが少なくないこと、一方財産がある「農商之父兄」は「学問之味」をまだ知らないで、地方からの就学を奨励して欲しい旨を述べている。この書簡は『福沢諭吉書簡集』(全9巻、岩波書店、2001～2003年)未収録のものである。



#### ■ 矢野亨宛福沢諭吉書簡 明治25(1892)年カ7月31日付 1通

【戒田昭氏・矢野穰氏寄贈】

福沢桃介との面会および高橋岩路の就職の世話を依頼したもの。矢野亨は旧姓吉良。安政2(1855)年愛媛に生まれる。明治5年11月6日に慶應義塾に入塾し、高知の立志学舎の教員や大阪府立商業学校の校長を務めた。文中で面会を依頼している福沢桃介は、旧姓岩崎。川越の出身で、明治15年から慶應義塾で学び、米国留学の後、諭吉の二女房と22年に結婚した。のちには木曾川の水力発電開発に尽力した人物である。高橋岩路は、諭吉と同郷中津の出身で、明治5年に女子への授産を目的に設立された慶應義塾衣服仕立局ではその責任者をつとめ、同局が丸善に委譲されると同時に丸善に移り、のち独立した。この書簡の時期には仕立業はやめており、翌26年に結核療養所養生園の庶務担当になっている。前掲『福沢諭吉書簡集』未収録。

#### ■ 金場小平次宛福沢諭吉書簡 明治20(1887)年3月22日付 1通

【神吉和彦氏寄贈】

名宛人の金場は神戸の廻船問屋で、中津藩と関係が深く、明治4年の藩の商法局の書類からは、交易で資金が欠乏した際には、金場から為替金の借入あるいは藩の米切手を抵当に借入を行っていたことがわかる。おそらくその縁で、福沢との関係も始まったのであろう。金場邸に宿泊したり、金子を預け関西での資金の調達先としていた。書簡の内容は、小平次の息子謹次と、伊勢四日市の商人水谷孫右衛門との養子縁組を仲介する内容である。謹次は「水谷謹治」の名で、『慶應義塾入社帳』に記載がある。それによれば、生まれは明治3年3月。伊勢国桑名郡四日市蔵町の「平民孫右衛門」の長男で、明治20年5月4日に入学し、保証人は福沢が務めている。前掲『福沢諭吉書簡集』未収録(『近代日本研究』26巻214～215頁)

### 慶應義塾関係資料

#### ■ 佐藤弥六宛小幡篤次郎書簡 明治13(1880)年10月14日 1巻

【購入】

明治26年1月18日付佐藤弥六宛福沢諭吉書簡と一緒に貼り込められていたもので、女性の再婚について意見を求められた小幡が、再婚は「二夫にまみえ」ることとは異なり、女性であっても夫を亡くしたならば、再婚してしかるべき旨を回答している。佐藤は、弘前藩士で、慶應元(1865)年に入塾した。明治になって弘前に戻り、教育や養蚕・リンゴ栽培などの産業に尽力し、森鷗外『渋江抽斎』にも登場する人物。また三男は佐藤紅緑(本名治六)で、すなわち弥六は詩人サトウハチロー、作家佐藤愛子の祖父にあたる。

## 韓国における資料調査と研究発表 ― 梨花女子大学に滞在して ―

福沢研究センター教授 西 沢 直 子

福沢諭吉歿後100年の展覧会を終えたところから、東アジア特に韓国で、福沢あるいは慶應義塾に関する資料調査を行いたいと考えていた。宮地正人先生が「福沢の脱亜論をどう考えるか」(『福沢諭吉年鑑』41、2014年)の中で指摘されているように、今では教科書の定番となっている福沢と「脱亜論」、あるいは福沢と脱亜入欧の組み合わせは、長い時間をかけて議論されて来たものであると言いはし難い。私の記憶にある1960年代70年代の教科書では、福沢は明治の「啓蒙」思想家であり、『学問のすゝめ』において身分制度の弊害と人民の平等を説いた人物でしかなかった。しかし1983年以降福沢研究センターで仕事をするようになって、気が付いてみると、福沢と朝鮮との関係は一般的に取り上げられるものになり、「脱亜論」が福沢の代表的著作として『学問のすゝめ』と並んで認識されるようになっていた。近年では、明治10年代後半からの福沢が、帝国主義あるいは植民地主義の鼓吹者として位置づけられることも多い。

福沢と朝鮮との関係は、彼が執筆した(正確には執筆したと考えられる、あるいは補筆であっても論旨は彼が容認したと考えられる)東アジアの国際秩序をめぐる論文を基調に論じられるものであり、また朝鮮開化派と呼ばれる金玉均、兪吉濬、朴泳孝らとの交流に注目すべきであることは明らかであるが、両者の関係を解くもうひとつの鍵は、入学時の記録である「慶應義塾入社帳」に記載されているだけで198名にのぼる、朝鮮からの留学生ではないであろうか。彼らが慶應義塾で何を学び、福沢から何を得たのか。福沢は彼らに何を伝えたいと考えたのか。そして彼らは帰国後にどのような活躍をしたのか。留学生の来塾ピークは、1895年ごろである。1885年の「脱亜論」よりは10年も後になる。福沢は「脱亜論」によって朝鮮に対する絶対的な姿勢を定めたのではなく、その後も彼と朝鮮との間には多様な交流が存在した。そこに福沢の本来の意図が存在するのではないか。彼らとの関係こそ、真に福沢が朝鮮に求めたものを体現しているのではないであろうか。

福沢研究センターは設立以来、福沢のもとで学んだ人々について追跡調査を行ってきた。しかし海外からの留学生については、ごく一部を除いて個別調査が進んでいるとはいえない。そこでぜひ1度、その足がかりを掴

むだけでも、少し長期に韓国に滞在してみたいと考えていた。ちょうど、2005年から始まった韓国梨花女子大学との関係が、2014年に入り1月に岩谷十郎所長と私が梨花女子大学で特別講義を行い、2月には日本での資料調査実習を希望する大学院生3名を2週間受け入れるなど、密接になってきた。背後には、韓国においてBK(Brain Korea) 21+という政府の研究助成が、人文学分野の「韓国学」研究に対しても行われることになったことが挙げられる。7月には『福沢研究センター通信』前号でもお伝えしたように、梨花史学研究所と福沢研究センターが部局間協定を締結するに至った。こうした交流の結果、私の韓国での調査希望に対して、梨花女子大学が人文科学大学校客員教授という肩書で、10月3日から12月14日まで図書館などを利用させてくれることになった。受入を担当してくださった白玉敬先生と崔碧茹先生に厚くお礼を申し上げたい。

福沢研究センターは、資料収集調査を中心としたアーカイブズとしての役割だけでなく、授業負担や講演会などの企画があり、また現在は『慶應義塾150年史資料集』の刊行が進んでいて、スタッフは誰もが超多忙な中、2か月半の間通常業務を離れることは、大変申し訳のないことであった。しかし快く送り出していただき、本当に感謝している。それにも関わらず、インターネットという“どこでもドア”のおかげで、学会等日本の仕事から完全に逃れることができず、さらに申し訳ないことになった。2か月半という期間は、十分な成果を得るには短かったが、それでも今後の方向性を考えることができた。

韓国では国史編纂委員会による資料のデータベース化が進んでいて、「歴史情報統合システム」にアクセスすると、政府の公文書からでも、官報や官員履歴書、古い新聞雑誌などからでも、多くの資料から関連記事を収集することができる。非常に便利である。ただ時折表示されない文字があり、また多くの同姓同名人物の情報が出てくるため、全ての情報を一瞬の内に得られるわけではない。さらに雑多な資料が同列に並ぶので、韓国史を専門としない者にとって、各資料の性格を掴み、重複する情報の中から最適な典拠を探すことは簡単ではない。しかしながら前述の198名の活躍の場

## 韓国における資料調査／主な動き

は、たとえば簿記の導入に尽力した金大熙や衛生観念の普及をめざした金益南など様々な分野にわたり、「統合」されたデータベースはありがたい。在日公館の記録といった基礎的な資料を網羅的に調査しながら、「歴史情報統合システム」を利用して個別の追跡調査を行うことが有効であると思われる。

また新資料の発掘も期待できることがわかった。一例をあげれば高麗大学では、韓国研究財団の助成を受け、2015年度より遺族から寄贈された兪吉濬関係資料の整理が始まるという。ちょうど9月30日～12月31日まで、大学博物館で展覧会が開かれていたが、文字資料だけでなく、衣服や旅行用の洗面用具から入れ歯まで展示されており、なかには日本への留学生に関する書類もあって、興味をひかれた。整理の進行が待たれるところである。

今回の滞在では、いくつかの研究会や学会にも参加した。10月25日に韓国外語大学で行われた日語日文学会の秋季国際学術シンポジウムは、「日本における「歴史」話法と交流の「歴史」—韓国との対話という未来志向的視点から—」と題し、4つの分科会と全体討論が行われた。福沢諭吉の脱亜論や留学生支援を扱った報告があり、全体討論の中でも福沢が取り上げられていた。しかし、往往にして明確な根拠が示されないステレオタイプな福沢論であり、また当時日本にはオピニオンリーダーは福沢しか存在しなかったかのような議論であった。

11月8日に西江大学で開かれた全国歴史学大会でも、近代史において韓日で歴史認識を共有するむずかしさを感じた。両国の若い世代にも関心を繋げ、発展的に解決していくためには、問題の普遍化が鍵になるのではないかと感じた。

また4校で講演および講義も行った。10月23日には慶熙大学で大学記録館長など創立記念事業の担当者に、福沢諭吉と慶應義塾の歴史および福沢研究センターの概要について話し、11月12日には梨花女子大学韓国文化研究院において明治期の慶應義塾への留学生について話した。12月4日には高麗大学日本研究センターにおいて、やはり朝鮮からの留学生を中心に福沢諭吉と平和思想について、最後に12月10日に梨花女子大学のBK21+作業チームおよび梨花史学研究所共催の特別講義で、日本のアーカイブズ事情について報告した。アーカイブズについては学生や教員から積極的な質問があり、関心の高さを感じた。この報告は、すでに梨花史学研究所の紀要『梨花史学研究』第49輯（2014年12月）に、韓国語訳が掲載されている。

実際に韓国に滞在してみると、これまでの短い滞在では感じる事ができなかった、両国の差異も感じるようになった。お互いの文化を尊重しながら理解しあうことは、たやすいことではない。しかし、歴史的考察を通じて少しでも役立てるように努力したいと考えている。

## 主な動き

### ■ 展示協力

- 地方で開催された下記の展覧会に協力、資料を貸し出した。
- ・10月11日～11月24日、「上山ゆかりの起業家 奥山春枝の生涯」展（山形、上山城郷土資料館）。講演会の様子は p.5 参照。
  - ・10月7日～12月14日、「早矢仕有的特別展」（岐阜県、山県市文化の里古田紹欽記念館）。
  - ・11月1日～12月14日、「お札の肖像～時代の開拓者たち～」展（大分県中津市、福沢記念館）。
  - ・1月31日～3月22日、「陸にあがった海軍一連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争」展（神奈川県立歴史博物館）。

### ■ 丸の内シティキャンパスでの講演会開催

1月15日（木）、慶應丸の内シティキャンパスが主催する定例講演会『夕学五十講』において、西沢教授が「一身独立」して「一国独立」す～福沢諭吉からのメッセージ～と題して講演を行った。『夕学五十講』では福沢や義塾をテーマにした講演ははじめてとなる。

### ■ ハーバード大学を訪問

本年は義塾に大学部（文学・理財・法律）が設置されて125年にあたる。発足時、ハーバード大学の支援を受けて

3名の教授が来日した。この由縁から、3月はじめに塾長ほか数名がハーバード大学を訪問、センターからも都倉准教授が同行した。これに先立ち、センターではDMC研究センターの協力を得て、福沢・義塾を紹介する広報動画を作成した。

### ■ 服部禮次郎記念基金による講演会

3月6日（金）、韓国梨花女子大学名誉教授の羅英均（ナ・ヨンギョン）氏をお招きして講演会を開催した。「日韓のはざままで」という演題でご自身の体験や韓日への思いを語っていただいた。会場には奉天時代の同級生たちの姿も見られ、講演後に旧交を温めた。なお、日韓併合時代における羅氏とそのご家族の話は、『日帝時代、わが家は』（みすず書房刊、2003年）に綴られている。

### ■ ワークショップの開催

3月7日（土）、近世近代研究交流会と合同でワークショップを開催した。テーマは「温泉史から見る近世・近代」、報告者は高橋陽一氏（東北大学東北アジア研究センター助教）「近世の温泉と交流—仙台藩領の温泉を事例に—」、高柳友彦氏（一橋大学経済学研究科講師）「近現代日本における温泉地の歴史的展開—研究史の課題をめぐって—」であった。

■ 諸会議

- \*平成26年度第2回運営委員会(11月6日)
- \*平成26年度第3回運営委員会(3月4日)
- \*平成26年度第2回福沢研究センター会議(12月19日)
- \*小泉基金運営委員会(1月20日)
- \*平成26年度執行委員会(1月20日、3月2日)
- \*『近代日本研究』第32巻編集委員会(3月3日)

■ 人事

- |         |    |               |               |
|---------|----|---------------|---------------|
| 〈所長〉    | 重任 | 岩谷十郎(法学部)     | 10月1日～        |
| 〈副所長〉   | 重任 | 平野 隆(商学部)     | 〃             |
|         | 重任 | 西沢直子(センター)    | 〃             |
| 〈所員〉    | 退任 | 小室正紀(経済学部)    | ～3月31日(定年による) |
| 〈訪問准教授〉 |    | 王賢鍾氏(延世大学准教授) | 1月30日～2月28日   |
| 〈事務局〉   | 退職 | 池上瑠菜(事務嘱託)    | ～3月31日(期間満了)  |
|         | 退職 | 石崎亜美(非常勤嘱託)   | 〃             |

■ 主な来往

- 以下、戦争プロジェクトに関連する聞き取り調査には(聞)を付す。
- \*戦争プロジェクト取材対応：南日本新聞(10月7日)、読売新聞(10月9日)、毎日新聞(10月9、29日)、NHK(10月20日)
  - \*石田幸生氏(DMC)による戦争プロジェクトに関する聞き取り調査：余語毅男来訪(10月10日)、江川泰三氏を訪問(10月16日)、鈴木昇氏を訪問(10月17日)、小坂明氏を訪問(10月20日)、大村鐘太郎氏を訪問(10月29日)、小池彬雄氏を訪問(11月4日)、金子芳雄氏来訪(11月10日)、土井利雄氏を訪問(11月18日)、増田敬三氏ほか4名の獣医畜産専門学校出身者を訪問(12月16日)
  - \*寺光貴子氏、叔父菅沼恒雄氏旧蔵品を寄贈(10月9日)
  - \*戸鞠亮平氏、学徒出陣壮行会記事掲載の「読売報知」夕刊を寄贈(10月10日)
  - \*安井裕二郎氏、時事新報関係資料を寄贈(10月16日)
  - \*宮本和江氏、父田中利雄氏旧蔵品予科時代アルバムを寄贈(10月17日)
  - \*佐々木明氏、学生新聞133点を寄贈(10月21日)
  - \*山名愛三氏、海軍関係資料を寄贈(10月21日、3月19日)
  - \*上原清子氏ほか展示見学のため来訪、その後塾長と懇談(10月22日)
  - \*千葉商科大学藤野奈津子氏来訪(10月23日)
  - \*村田久子氏、兄肥田頼氏の遺品(日章旗)を寄贈(10月29日)
  - \*田中アイ子氏、父平田保二氏旧蔵資料アルバム他を寄贈(11月4日)
  - \*中村長哉氏来訪(聞)(11月12日)
  - \*笹山堅氏来訪(聞)(11月12日)
  - \*法政大学笹川孝一ゼミ、施設見学のため来訪(11月13日)
  - \*佐藤喜三郎氏、父国三郎氏関係資料を寄贈(11月14日)
  - \*吉田泰子氏、父山本庫造氏・母弥生氏旧蔵アルバム寄贈(11月19日)
  - \*渋谷栄一記念財団実業史研究情報センター松崎裕子氏、帝国データバンク史料館後藤佳菜子氏来訪(11月25日)
  - \*戒田昭氏、矢野(吉良)亨宛福沢書簡2通を寄贈(12月4日)
  - \*北原かな子氏(青森中央学院大学)、資料閲覧のため来訪(12月11日)
  - \*河村雄太郎氏、父堅太郎氏旧蔵の日章旗を寄贈(12月11日)
  - \*高麗大学 Leighanne Yuh 氏、田中篤憲氏来訪(12月22日)
  - \*梨花女子大学から朴榮恩氏、梁熙晶氏来訪(1月6～20日)
  - \*増山治一郎氏、父桂一郎氏旧蔵資料を寄贈(1月14日)
  - \*個人より竹越与三郎宛書簡寄贈(1月22日、2月24日)
  - \*塚本悠策氏、兄太郎氏(戦没塾生)の関係資料を寄贈(1月26日)
  - \*奥井四良氏、森直也氏来訪(聞)(1月28日)
  - \*延世大学韓国知識人の東アジア留学調査チーム来訪(2月4日)
  - \*矢放昭文氏(京都産業大学)、資料閲覧のため来訪(2月25日)
  - \*滝口肇氏来訪(聞)(2月28日)

■ 出張・見学

- \*西沢、韓国梨花女子大学にて調査研究(10月3日～12月14日)
- \*徳永暁、上山城郷土資料館へ展示作業手伝い(10月6日)
- \*竹屋、全国大学史資料協議会全国総会・研究会に出席(10月8日)
- \*堀、上山城郷土資料館へ展示替え手伝い(10月26日)
- \*都倉、結城所員、資料返却のため芳賀日出男氏を訪問(11月6日)
- \*都倉、小山、資料返却のため、わだつみのこえ記念館を訪問(11月10日)
- \*都倉、石田、鳥居元塾長を訪問(聞)(11月13日)
- \*都倉、横山、展示会資料返却のため、高橋よし子氏宅を訪問(11月14日)

- \*都倉、横山、中村、展示会資料返却、資料調査のため、上原家を訪問(11月16日)
- \*岡部、上山城郷土資料館へ展示撤収作業手伝い(11月29日)
- \*都倉、小俣嘉男氏を訪問(聞)(1月15日)
- \*都倉、小寺良和氏を訪問(1月16日)
- \*山内所員、西沢、大手町産経新聞社で座談会(1月17日)
- \*都倉、芦屋三田会にて三村亮平氏を訪問(1月17日)
- \*都倉、横山、山名愛三氏宅訪問(聞)(1月30日)
- \*都倉ほか、綿貫民輔氏を訪問(聞)(2月9日)
- \*都倉、長野重一氏を訪問(聞)(2月10日)
- \*西沢、山根、兵庫県三田市で福沢書簡などの調査(2月10日)
- \*都倉、塾長・理事ほかとともにハーバード大学を訪問その後資料関係作業(3月4～9日)
- \*岩谷、学会発表・資料調査のためフランス(3月9～23日)
- \*都倉、佐々木雅國氏を訪問、父正五氏旧蔵資料受贈(3月10日)
- \*都倉、成田、渡辺教義氏を訪問(聞)(3月16日)
- \*都倉、小山、松尾俊治氏より野球部関係資料受贈(3月17日)
- \*都倉、横山、故間崎万里氏、故藤林敬三氏関係資料受贈(3月18日)
- \*西沢、資料調査のため梨花女子大学ほか訪問(3月22～25日)
- \*都倉、横山、堀山久生氏宅を訪問(聞)(3月26日)
- \*都倉ほか、田村真氏訪問(聞)(3月27日)

■ 講師派遣

- \*西沢、みらく会(昭和36年経済卒)で講演：「福沢諭吉の家族論」(10月1日)
- \*西沢、慶熙大学校慶熙記念館で講演：「福沢諭吉と慶應義塾」(10月23日)
- \*都倉、福沢諭吉記念文明塾で講義：「福沢諭吉と戦争」(10月25日)
- \*坂井顧問、上山城郷土資料館歴史講演会(特別展「上山ゆかりの起業家 奥山春枝の生涯」関連企画)で講演(10月26日)
- \*西沢、梨花女子大学韓国文化研究院で講演：「慶應義塾と朝鮮近代留学生」(11月12日)
- \*西沢、高麗大学日本研究センターで講演：「近代日本と福沢諭吉の平和思想」(12月4日)
- \*西沢、梨花史学研究所および梨花女子大学史学科で講演：「日本におけるアーカイブス」(12月10日)
- \*都倉、SFC 中・高等部の学部説明会で説明(12月10日)
- \*西沢、丸の内シティキャンパスで講演：「一身独立して一国独立す～福沢諭吉からのメッセージ」(1月15日)
- \*西沢、大阪シティキャンパスで講義：「家族も“学問”である—福沢の生きた家族」(1月31日)
- \*西沢、横浜初等部で講演：「福沢先生とお母様」(2月3日)
- \*都倉、幼稚舎で講演：「福沢先生の雰囲気」(2月3日)
- \*有末所員、中津で開催の福沢先生法要時記念講演会で講演：「戦後社会科学と福沢諭吉思想—イデオロギーを超えて」(2月3日)
- \*岩谷、交詢社常例午餐会で講演：「情と理で読み解く長沼事件—福沢諭吉の法交渉」(2月20日)
- \*小室所員、大阪シティキャンパスで講義：「幕末・維新期の“実学”思想—『学問のすゝめ』の視座」(3月21日)

■ 展示協力

- \*岐阜県山県市文化の里古田紹欽記念館で開催の「早矢仕有的特別展」に資料提供(10月7日～12月14日)
- \*山形県上山城郷土資料館と共催で「上山ゆかりの起業家 奥山春枝の生涯」展(10月11日～11月24日)
- \*大分県中津市福沢記念館で開催の「お札の肖像～時代の開拓者たち～」展に資料提供(11月1日～12月14日)
- \*神奈川県立歴史博物館で開催の「陸にあがった海軍—連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争—」展に資料提供(1月31日～3月22日)

■ 計報

- \*元事務長 東田全義君逝去(11月2日)

■ その他

- \*理事、広報、総務、管財、センターで「還らざる学友の碑」に戦没者名簿を納める(10月27日)
- \*元所長、所員の小室教授(経)が福沢賞を受賞(11月7日)
- \*福沢諭吉記念第53回全国高等学校弁論大会に審査員派遣(12月5日)

❖ スタッフ一覧

所 長	岩谷 十郎	法学部教授	川崎 勝	
副 所 長	平野 隆	商学部教授	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授
専任所員	西澤 直子	副所長、福沢研究センター教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	曾野 洋	四天王寺大学教授
(兼運営委員)	澤田 達男	理工学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	武林 亨	医学部教授	田中 康雄	元群馬県立文書館館長
	林 温	文学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
	山内 慶太	看護医療学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
所 員	米山 光儀	教職課程センター教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	有末 賢	法学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	井奥 成彦	文学部教授	前坊 洋	
	上野 大輔	文学部助教	松沢 弘陽	
	梅津 光弘	商学部准教授	松田宏一郎	立教大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	成蹊大学教授
	太田 昭子	法学部教授	森川 英正	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山田 央子	青山学院大学教授
	小川原正道	法学部教授	林 宗元	韓国関東大学校名誉教授
	加藤 三明	幼稚舎教諭	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	Knaup, Hans-Joachim	経済学部教授	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	小室 正紀	経済学部教授	Nguyen thi Hanh Thuc	
	末木 孝典	高等学校教諭		
	馬場 国博	湘南藤沢中・高教諭	研究嘱託	巫 碧秀
	Ballhatchet, Helen	経済学部教授		石井寿美世
	宮内 環	経済学部准教授		吉岡 拓
	結城 大佑	女子高等学校教諭		平山 勉
顧 問	岩崎 弘	元幼稚舎教諭		堀 和孝
	小泉 仰	名誉教授		坂井 博美
	坂井 達朗	同		山根 秋乃
	佐志 傳	元高等学校教諭		柄越 祥子
	寺崎 修	名誉教授		大庭 裕介
	松崎 欣一	名誉教諭	事 務 局	酒井 明夫 事務長
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授		竹屋 早月 主 務
	飯田 泰三	島根県立大学副学長		池上 瑠菜 事務嘱託
	井田 進也	大妻女子大学名誉教授		印東 史子 同
	區 建英	新潟国際情報大学教授		高田真規子 派遣職員
	掛川トミ子	関西大学名誉教授		石崎 亜美 非常勤嘱託
	片岡 豊	白鷗大学教授		澁澤 彩佳 同
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、17名  
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第22号

Newsletter of  
Fukuzawa Memorial Center for  
Modern Japanese Studies,  
Keio University

発行日 2015年3月31日 (年2回刊)  
編 集 慶應義塾福沢研究センター  
発 行  
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45  
電 話 03-5427-1604  
http://www.fmc.keio.ac.jp/  
印 刷 (有)梅沢印刷所